1954年に開設された千葉大学医学部放射線医学教室の思い出

初代の教授は筧弘毅先生でした。開設当初のスタッフは教授以下助教授1名、講師1名、医局員2名という小所帯でした。日本癌学会長与又郎賞第三回受賞者は当時講師であった市川平三郎氏でした。今年の第十三回受賞者は当時助教授であった梅垣洋一郎です。

開設とはいうものの、設備としては診断用X線装置一台、治療用X線装置が一台で、研究機器はほとんどありませんでした。そして開設早々から筧教授は研究のため2年間米国に出張されました。

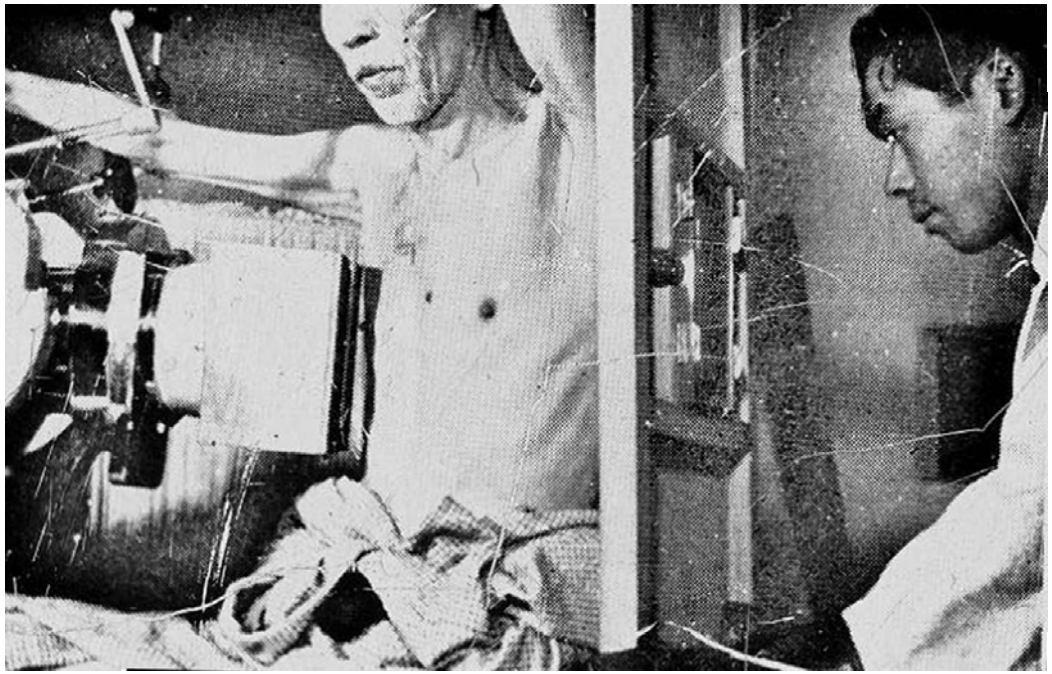
私共はいわば留守番でした。しかし私はこのような環境から育ったことに感謝しております。それは自由闊達な精神であり、職場であったからです。市川氏とは国立がんセンターで再び共に仕事をしましたが、この精神を受け継いでいました。

梅垣先生発表資料『癌研特別セミナー　２００８年度長与賞受賞　「がんの放射線診断・治療の研究と　重粒子線治療の実現」』より

千葉大放射線医学教室の思い出-2

ラジウムで食道癌を治せるならＸ線でも治せる筈

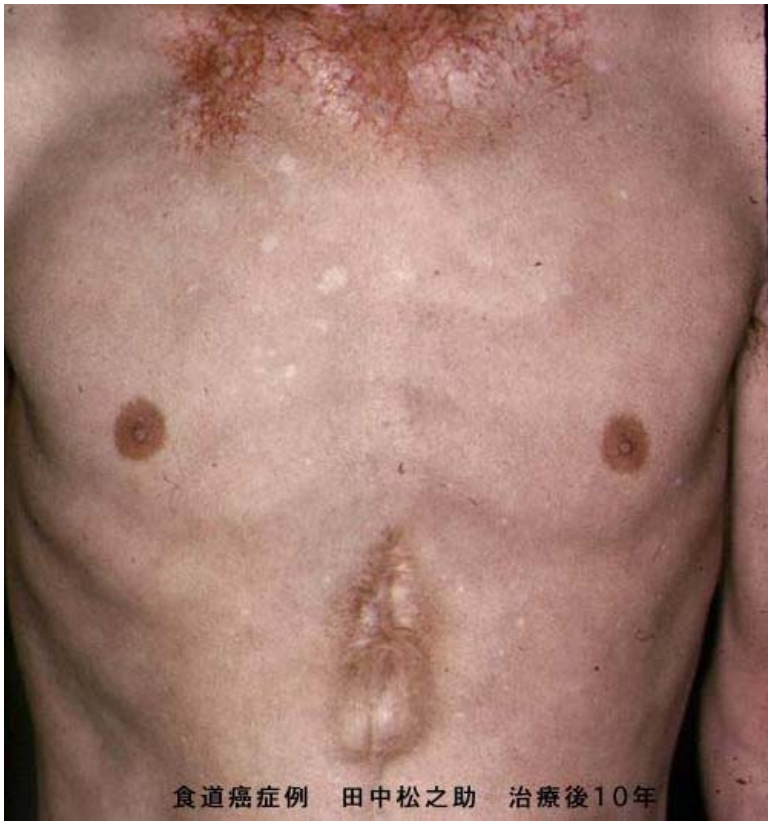
開設されたといっても、放射線治療に使えるのは160KVpの深部治療装置が一台あるだけでした。



手製の透視装置で位置決めをしてできるだけ少ない照射野での照射を行っている状況です。つまり診断と治療を一体化していました。

日本ではこの時期までX線治療で治癒した食道癌症例はありませんでした。何としても治したいと考えて、毎回の治療で透視照準を行いました。透視している医師は中野政雄氏です。この方法で4例の食道癌症例が続けて治癒しました。しかし治療に当たる医局員の放射線被曝のことを考えると、このような治療は長続きしません。又患者の被曝も多くて、放射線肺炎等の合併症も多く発生しました。

千葉大放射線科で透視照射治療を受け
10年以上生存した症例　1955年



1955年に中山外科で手術適応外と診断され、胃瘻を作成して放射線治療を依頼されました。右の写真は10年後の状態で上胸部の照射後瘢痕と胃瘻閉鎖痕が見られます。日本で初めてX線治療により治癒し長期生存した症例の一人でした。